

Title	論文生産履歴から見る日本の研究者の分布と移動
Author(s)	川島, 浩誉; 富澤, 宏之
Citation	年次学術大会講演要旨集, 30: 1047-1048
Issue Date	2015-10-10
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/13453
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

論文生産履歴から見る日本の研究者の分布と移動

○川島浩誉, 富澤宏之
(科学技術・学術政策研究所)

本発表は、昨年度より実施している「研究者を単位とした計量書誌学」研究についての報告である。

近年、日本においては、論文数や高被引用論文比率の低迷、国際的な共同研究ネットワークからの乖離、博士課程入学者数の減少、大学等教員の職務時間に占める研究時間割合の低迷など、個々の研究者の努力の総和では解決し難い構造的な問題が数多く指摘されている。

本研究では、これらの問題の背景となる日本の研究システムに関して、研究者＝論文著者の粒度から日本の論文生産構造の時系列変化や他国との違いを明らかにすることを目的とし、論文データベース内に現れた論文著者の論文生産履歴の分析を行っている。

特に、それぞれの著者が何年に学術論文の生産活動に新規参画し、何報目で初めて責任著者を担ったかの分布や、近年の大学システム改革によって流動化が進んだ学術研究者がどのように所属機関を移動しながら学術論文を生産するかに着目し、その特徴を明らかにすることを通じて、分析を進めている。

昨年の本学会における発表では「論文著者 ID による研究者を単位とした計量書誌学的分析」と題し、本研究の起点となる集計結果として、

- 日本は論文数が同程度の国と比べても論文著者になる研究者の人数が多い(ユニークな研究者数が大きい)
- 日本の研究者数の多さは「日本は1報のみに名を連ねて研究の世界から離れる著者(主として学生・大学院生が想定されている)が多いからではないか」という従来の仮説では説明が出来ず、むしろ2004年以前は非常に多くの論文に関わった研究者の割合が他の主要国と比較して高かったということを明らかにし、補足として本研究で用いている論文書誌情報データベースの研究者単位の名寄せ精度についての検証結果を報告した。

本年は、新たに明らかになった、

- 日中韓は米欧と比較して、ある年の研究者に占める初出の研究者(初めて論文に名を連ねる研究者)の割合が高い。同様に、日中韓は米欧と比較して、論文数全体に占める初出の研究者が名を連ねている論文の割合も高い。: Fig. 1, Fig. 2
- 日本は研究者全体に占める責任著者になったことがある研究者の割合が低い(このことは、日本は独立した研究者が少ない、ということを示している可能性がある)。: Fig. 3
- 日本は、ある年に初めて論文著者として名前を連ねた研究者のうち、その後に他の機関に所属して論文に名を連ねた研究者の割合が低い(このことは、日本はある種の流動性が低い、ということを示している可能性がある)。: Fig. 4

を中心に報告し、昨年の報告事項と併せて、確認された事実から推測可能な、日本の研究システムに起きている構造的課題について議論する。

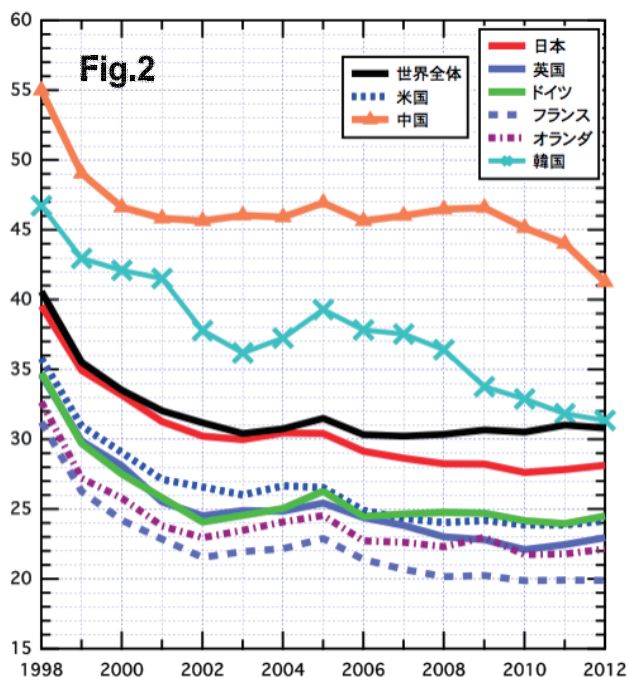
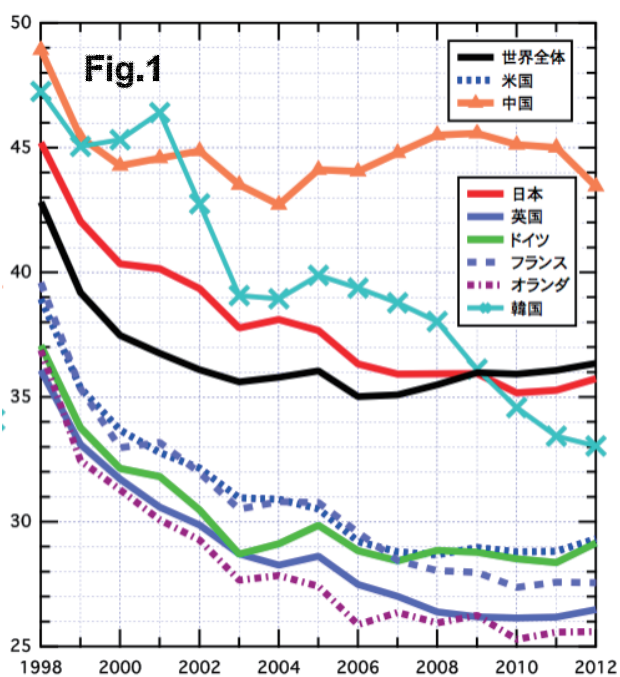


Fig. 1 全論文著者に占める初出著者の割合 (%)

Fig. 2 全論文に占める初出著者を含む論文の割合 (%)

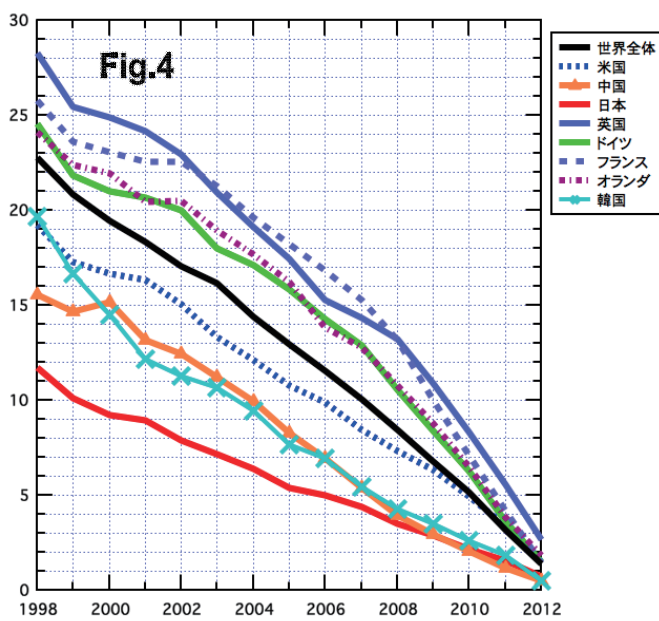
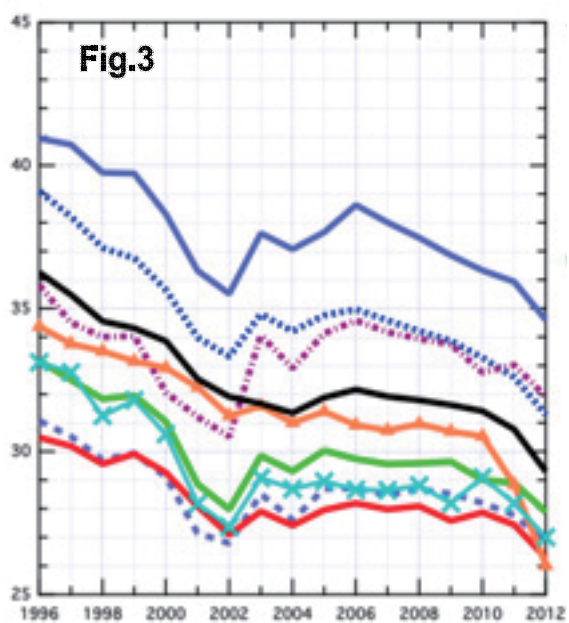


Fig. 3 全著者に占める責任著者になった著者の割合 (%)

Fig. 4 各年の初出著者のうちその後に他機関での論文生産が確認できたものの割合 (%)